

江東区子ども家庭支援センターの周辺

新澤 誠治

「生みやすい、育てやすい街づくり」を目標に、東京の下町に「江東区子ども家庭支援センター」が公設民営の形で設立され、それから一年六カ月、地域の家庭に親しまれやすくと、通称「みずべ」として活動してきました。

この「みずべ」には、毎日、たくさん親子がつどい、所長として子ども、若いお母さん、お父

さんに出会い、それが子育ての最前線に立ち会っている感じで、親子の姿に接して学ばされたり、考えさせられたりして、毎日が発見の日々で、そんなことを少し報告させていただきます。

子育てひろば「みずべ」の紹介

かつては江東区は東洋のベニスと言われ、街の

中に運河がめぐらされていましたが、その名残りとして、隅田川の支流としての大横川があり、その水辺に区民館があり、その三階に子育てひろばとしてのセンターがあります。

四一三平米の床面積のところに、受付、事務所、ロビー、プレイルーム、グループ懇談会室、体験学習室、和室があり、火曜日から土曜日にかけて、午前十時から午後四時まで、毎日、七十組くらいの親子が来館して自由に過ごしています。

私たちには大きく二つの理念、目標があり、一つは「街の中の子育てひろば（共同体）」をめざし、①ふれあいひろば②学びあいのひろば③支えあいのひろば④分かちあいのひろば⑤育てあいのひろばと五つの柱を立てて活動をしています。

もう一つ、お母さんに「子育てを楽しく」という願いをもち、「子育てを一人で背負わないで、みんなで育てましょう」「困ったら助けて！」と

言いましょう」「完璧なお母さんを目指すのではなく、肩の力を抜きながら育てていきましょう」「お父さんも子育て参加を！」「お母さんが自分自身の時間ももち、一人の女性としての、自己発揮をしていきましょう」とメッセージを送っています。

ふれあいひろばで

午前十時から午後四時まで親子が自由に過ごすことができます。毎日、平均七十組位の親子が来館、子どもと親、子どもたちが、親同士が出会い、交わっています。そこにスタッフとボランティアが入り、子どもに話しかけたり、お母さんに子育ての楽しみ、悩みを聞いたり、またお母さん同士が友達になるようにつなぐ役割もしています。

そこでお母さんは「いままで部屋の中で子ども



▲プレイルームの風景

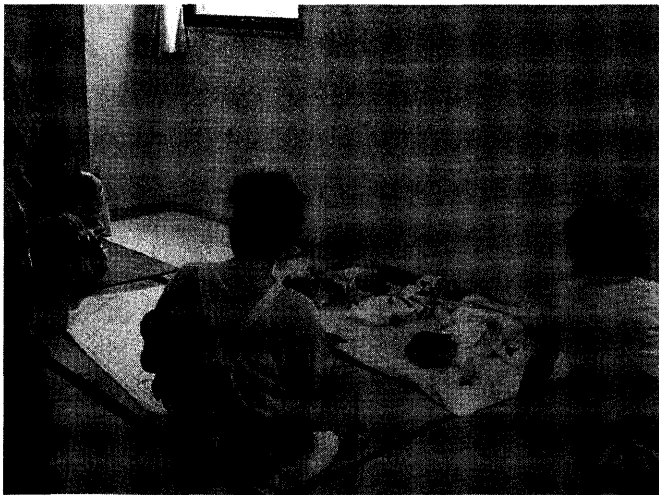
と向かい会い、誰とも話す機会がなかったので、愚痴を聞いてもらったり、お母さん同士で話すことができて、ほっとした、力を得た」と言います。都会の場合、地域の中で家庭は孤立し、お父さんの存在が薄く、母親一人に保育の責任が負わされて、密室の中で子どもと向かい合い、イライラしつつ育児する姿が浮かび上がります。

公園は地域の中の遊び場ですが、お母さんの中には「だれも居ない時をねらい、子どもを連れて行く」「お母さん同士の関係の中に入れないで、公園を一回りして帰る」という人もいます。お母さんたちの仲間の中に入れない人、砂場などで子ども同士でおもちゃの取り合いになったときに、相手の親のことが気になり、どう対応していいか迷い、それを避けて、公園には行かない人もいるのを知りました。

多くの人たちによる支え合いの中で

「みずべ」には、すでに子どもが大きくなった、子育ての先輩お母さんのボランティアが三十五人登録されています。ふれあいひろばの中に自然に入り、お母さんの話を聞いたり、赤ちゃんを抱いてもらったり、スポットタイムで子どもにお話しし、パネルシアターをしてくださる人もいます。めだかクラブと称して、手作り絵本、手作りおもちの指導をしてもらったりもしています。

街の中には子どもが好き、お話をしてあげたい、絵本を見せてあげたい、何か後輩のお母さんの力になれたらと願っている人がたくさんいることを知りました。六十歳を過ぎた人も、私は何にも技術を持っていないが赤ちゃんは好き、「お子さんを抱かして」と言っつて、毎日のように来てくださる人もいます。



▲和室（ボランティアさんと一緒に）



▲手づくり絵本

子どもの夜泣きに悩むお母さんに、ボランティアのお母さんが、「私も夜泣きに困ったときがあったけど、いつのまにか寝るようになったわ」「子どもはまだ、昼、夜がわからないから、少し付き合う気持ちでいなさいよ」「夜泣きをする子は賢い子になるといわれているよ」等と励ましています。

先輩のお母さんの話は、時には私たち保育者より励ましの効果があります。また赤ちゃんを抱く、オムツの交換、ミルクを飲ませる手伝いをする中で、育児の方法の見本を示してもらう結果になっています。こうして援助されたお母さんの中には、「子どもの手が離れたら今度はボランティアで働きます」と言われる人が何人もいます。

学びあいのひろばの中で

母親講座を昨年までは、毎月していましたが、

今年度から隔月にし、子育て塾、懇談会、年齢別グループ、悩み別グループなどお母さん同士が学びあうことを重視しています。十五人から二十人の小グループをつくり、そこにスタッフが入る、保育、臨床心理の研究者に入ってもらうなどして、三回から五回の連続の学習会をします。

「子どもを叱ることについて」「子どものけんか」「生活リズムを見直す」「絵本とテレビ」「がんばりちゃんとの付き合い方」などをテーマにして講師の基本的な話を聞きつつ、みんなで自由に話し合います。

料理のためのまな板がない家庭があったり、驚くこともありますが、でもお母さんの賢明さ、一生懸命さに目を見張り、今のお母さんはだめというが、こんなにすばらしいではないかと思うこともしばしばあります。

一つ例をあげると、「生活リズムを見直す」で、

東京成徳短大の今井和子先生から、「子どもたちに本来備わっている自然の生体リズムにできるだけそい、気持ちよく生活できることが大切です。三つの快（快食、快眠、快便）が健やかな体をつくり、情緒、心の安定につながっていく」という、子どものリズムの大切さが話されました。

その後に、お母さんたちは三日間の子どもの生活時間、生活リズムの流れを記入し、そこで気づいたことを話し合いました。そこでTV視聴の長さ、またTVをつけっぱなしにしていることに気づきます。これに対してTVをつけっぱなしにせずに終えたら消す、一日二時間程度内として見る等と話し合い、みんなで試みてみることにしました。すると「生活にメリハリがついてきた」「TVを消しても子どもはけっこう大丈夫だった」等と報告しあいました。

また、「外遊びが少なく、買い物の際に外に連



▲談話コーナー（エプロン姿がボランティア）

れて行き、それを遊びとかねていた」、これに対して「外遊びをたっぷりとるように試みた」、すると、子どもなりに○○したら「お外に行く」という、生活の流れの見通しがもてるようになってきた等と報告会。

こうした活動を通して、子守唄を唄わない、TV、ビデオに子守り、本、雑誌の情報による育児、そのために五感を通して子どもとふれあう育児に欠ける、お父さんが育児に参加しにくい状態など、お母さんの子育ての姿が見えてくると共に、お母さんの賢さ、子どもへの愛情の強さを感じて、教えられることが多くありました。

「子育てひろば」としての子育てセンター活動は、まだ緒についてはかりで、これから実践を重ねて、みんなで育てあう保育を創造していきたいと思っています。

（江東区子ども家庭支援センター）